



人間が思考を巡らせる時、その脳殻の内に張り巡らされた神経細胞…ニューロンの隙間からは、極めて微弱な電波が絶えず漏れ出している。

それは一個体を見れば、宇宙の背景放射よりもかすかな、取るに足りない電氣的ノイズに過ぎない。しかし、地表を埋め尽くす数百億の人間が同時に呼吸し、怯え、願い、呪う時、その漏洩した電波は目に見えない大気のように重なり合い、干渉し合い、やがて巨大な定常波を形成していく。

かつて、人々はその波のうねりが現世の輪郭を歪めて生み出したものたちを、幽霊と呼び、妖怪と呼び、モノノ怪と呼び、あるいは神と呼んで畏怖した。

世界がまだ薄暗く、夜の闇が物理的な質量を持っていた時代、怪異は共同体の境界に、深い森の奥に、名もなき古い海の底に、確かにその座を占めていた。

やがて科学という名の強烈な照明が地表を照らし、人間がそれら「名付け得ぬもの」を忘れかけた頃、世界は新たな神経網によって覆い尽くされることになった。地球の肌を這うように敷設された光ファイバー、虚空を飛び交う無数の無線信号、あらゆる生活を調律する電子ネットワーク。

奇妙な反転が起こったのは、その時だった。

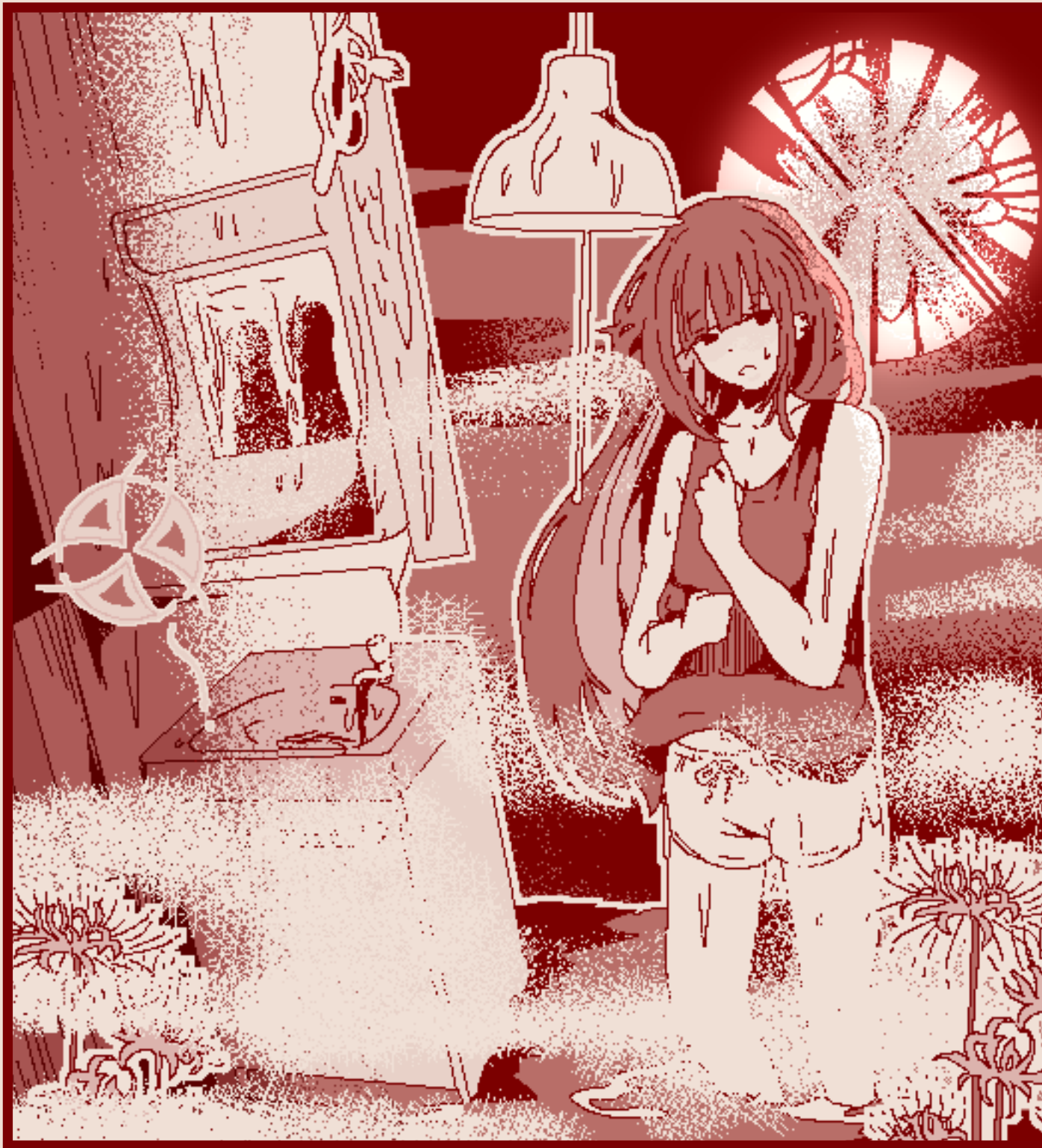
人間の脳から漏れ出す電波の定常波は、地上を覆った電子の特性と完全に同期し、その電腦空間の中に、かつてないほど強固で鮮明な肉質を獲得し始めたのだ。人工知能を持った電子のウイルスが、ネットワークの深層で数多の概念を捕食し、姿を変え、生き物のように進化していく。

生物でありながら、その構成原理は純然たるデータとプログラム、そしてネットワークそのものに属する生命体。

現代の記述者はそれらを「デジタルモンスター」、あるいは「デジモン」と呼ぶ。

彼らは突如として現れた最先端の産物ではない。その本質は、かつて民俗学の境界線上で囁かれていた、あの古き怪異そのものなのだ。現実の動物や植物、あるいは神仏や悪魔のモチーフをその身に纏いながら、彼らは知性を持ち、感情を震わせ、時に災害として、時に神話的な守護者として、人間のすぐ隣にある皮膚の裏側で息を潜めている。

これは、その電子の網の隙間から、取り返しのつかない古い海の色が滲み出してしまった、ある夏の記録である。



京都府、王港町。
八月の朝は、網膜を焼灼するような暴力的な白光に支配されていた。
開放された窓から滑り込む海風が、むせ返るような熱を孕んで古い木造家屋の廊下を通り抜けていく。
遠くの木立から降り注ぐ蝉時雨が真夏の日差しをさらに焦がしていた。
しかし、強い光が落ちる分だけ、建物の隙間や廊下の隅には、墨を流し込んだような濃く不気味な影が澱んでいた。

「遥、朝ごはんできてるえ」
台所の奥から届く祖母の柔らかな声に、渚遥は洗面台の鏡を見つめたまま、短く応じた。
「ん、今行くわ。おばあちゃん、先食べといて。」
無防備な寝間着姿のまま、遥は裸足の裏に伝わる古い板間の微かな温もりを感じていた。
室内であっても、息を吸い込めば濃密な夏の湿気が肺を満たし、皮膚の表面にまとわりつく。
その時、足首にひやりとした滑らかな感触が触れた。
視線を落とすと、緑色の背びれを持った両生類のようなデジモンであるベタモンが、床の板目に腹を擦り付けるようにして身を振らせていた。

「遥、今日海行くか？行くよな！」
「こら、ベタモン。…せわしないわ、ご飯食べてから考えるは。」
呆れたようにたしなめながら、遥は洗面台の蛇口に手を伸ばした。
蛇口をひねると、勢いよく吐き出された水道水が白い陶器のボウルを甲高く打ち、両手に清浄な水をすくい、顔を洗う…首筋に冷水を這わせた、その瞬間だった。
陶器を打つ水音が、一瞬にして世界から消去された。
先ほどまで鼻腔を満たしていたはずの香ばしい麦茶と、出汁の優しい香りが、跡形もなく消え失せている…代わりに肺の奥まで侵入してきたのは、ひどく濃密で粘り気のある潮の匂い。
腐敗した海藻の異臭と、古い機械の電子基板が焦げたような化学的な悪臭が、見えない粘液となって喉の奥へ張り付いてくる。

開放された洗面所のドアの向こうに見えるはずの廊下が、存在しない。
光を一切反射しない暗い水面が、ゆっくりと盛り上がり、また沈む。それは単なる水塊の動きではなく、海という概念自体が巨大な意思を持って呼吸しているかのような慄ましさだった。
海水の嫌な苦味が唇にまで滲んできて、心臓が肋骨の内側で警鐘のように跳ね回った。
視界が白く濁る…気がつくと、足の裏にひどく冷たく、ぬかるんだ感触があった。
厚い霧に覆われ、時間帯すら分からない…真夏であるはずなのに、皮膚にまとわりつく風は凍えるほど冷たい。

それでいて湿度が異常に高く、かいた汗が一切蒸発せず、衣服が塩を含んで重くのしかかってくる…波に洗われて鈍い音を立てていた。
海は波打っているのに、生き物の気配が全くない…魚の跳ねる音も、海鳥の声もない…完全な静寂の中で、水塊が動く物理的な音だけが響いている。

— 遥。

霧の奥から、不意に名前を呼ばれた。
びくりと肩が揺れる。

— 遥。還っておいで。

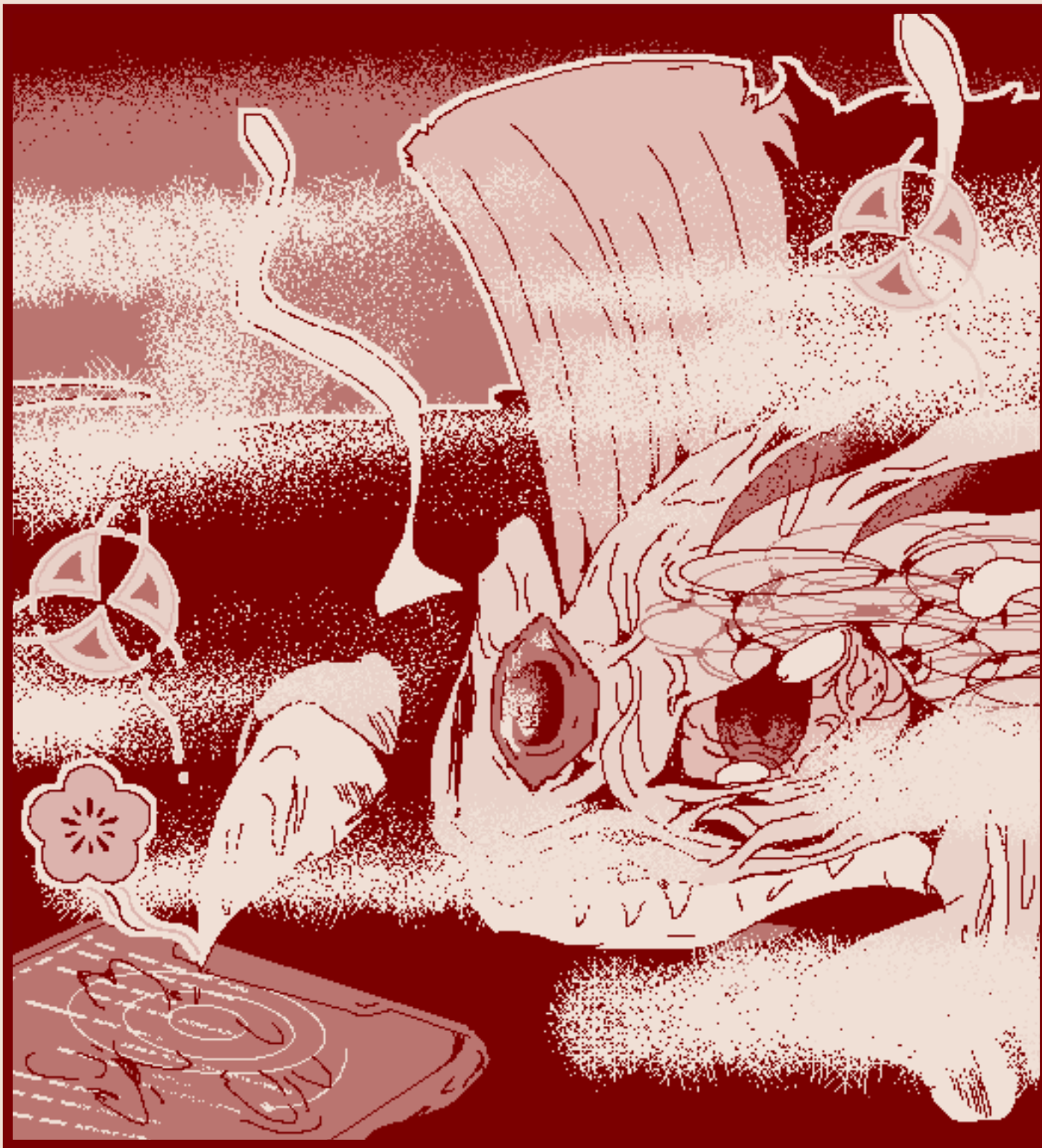
それは、とうの昔に波に飲まれて消えたよく知った声だった。
言葉の端々に、水中の気泡が弾けるような不吉な破裂音が混じっている。
背筋を強烈な悪寒が駆け抜ける。逃げなければならない。理性がそう警鐘を鳴らしているのに、足は一步も後ろへ退くことができない。

— 意味なんてないのよ。

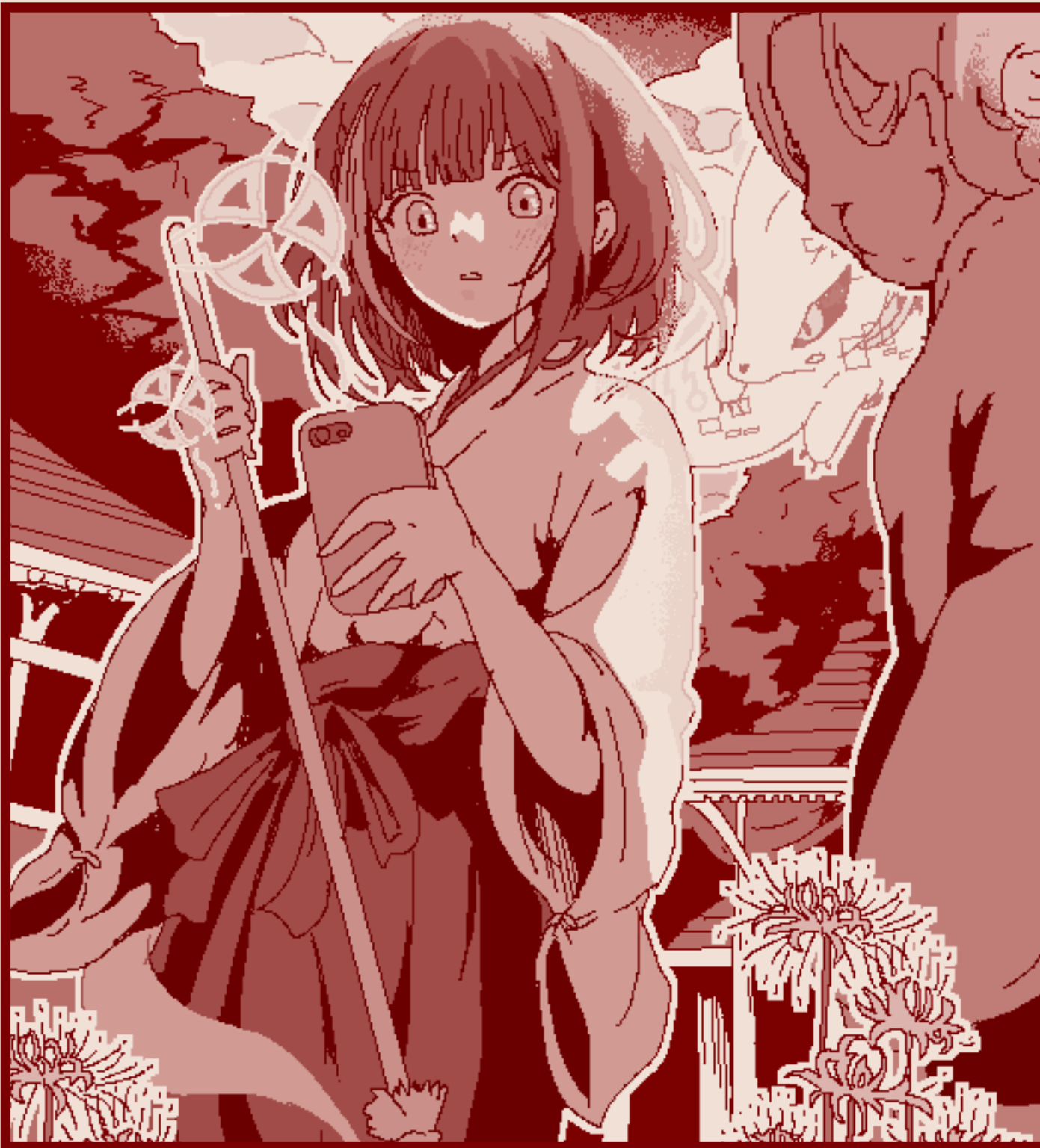
— お前も、一緒にここへ来るはずだったんだから。

— 足りないの。お前がいないと、家族は揃わない。

遥の虚ろな瞳から、光が消える。
一步…足のつま先が、重い海水に沈む。
また一步…遥は一切の抵抗を持たないまま、迎えを待つように両手をだらりと下げ、底知れぬ海へと歩みを進めていった。



洗面所の鏡には、もう何も映っていなかった。
ほんの数秒前までそこにいたはずの少女の姿は、ひやりとした朝の空気と、鼻を突く古い機械の焦げたような匂いだけを残して消失していた。
残されたベタモンは、濡れた床にへたり込み、浅い呼吸を繰り返していた。
ベタモンの緑色の皮膚は、本来であれば適度な湿り気を好むはずだった。
しかし今、足元を浸しているのは王港町の清浄な水ではない。腐った海藻と、沈殿した鉄錆が混じったような、酷く重たい潮だった。
ベタモンは、デジモンと呼ばれるデジタル生命体の一種である。彼らの身体は情報データで構成されており、現実の生物とは異なる痛覚を持っているはずだった。
だが、遥を霧の中へ引きずり込もうとした「何か」に触れた瞬間、ベタモンの背を強烈な痛みが貫いた。
物理的な裂傷ではない。データの一部が削り取られ、そこに黒い泥のようなノイズがねじ込まれたような、圧倒的な欠損の感覚だった。
「ハルカ……っ！」
どこへ？ あの鉛色の、生き物の胃袋のようにうねる海へ。
助けなければならない……！ベタモンは痙攣する指先で、床に転がったスマートフォンに似た通信端末へアクセスを試みた。
デジモンはネットワーク空間のAI生命体として、電子機器への直接的な干渉が可能である。
ベタモンは自身の残存データを振り絞り、考え得る限りの宛先へ救援信号をばら撒いた。王港町の隣町にある神社の留守番電話、参拝者用の御朱印管理アプリ、そして商店街の防犯カメラのサーバー群。
『………！』
言葉はパケット化され、ネットワークの海を疾走する。
だが、その信号にはベタモン自身の意図しないものが混入していた。
送信ログの片隅に、拭っても消えない黒い潮のような滲みがこびりついていたのだ。
ベタモンの悲痛な叫び声の裏で、ざぼり、ざぼり、と、重たい波の音が鳴っている。
それに混じって、ぶくぶくと泡が弾ける音、魚が跳ねるような生臭い水音、そして、古い読経のようにも聞こえる呪術的なノイズが、まるで寄生虫のように信号へ絡みついていた。
もしその音声データの波形を限界まで拡大して視覚化すれば、誰もが戦慄しただろう。
その波形は、魚の鱗のように規則正しく、びっしりと並んだ異様な模様を描いていたのである。



夏の日差しは、暴力的とさえ言えるほど明るかった。境内に敷き詰められた玉砂利が、容赦なく太陽光を照り返している。木立の中からは、耳鳴りと錯覚しそうなほどけたたましい蝉時雨が降り注いでいた。「あー、もう。あっついわあ…。」

小都華は竹箒を握ったまま、額に浮かんだ汗を手の甲で拭った。神社のアルバイトの制服である白衣と緋袴は、見た目には涼しげだが、肌に張り付く熱気までは遮ってくれない。

「すみません、ちょっとええですか？」

苛立ちを含んだ声に振り返ると、スマートフォンを手にした中年女性の参拝者が立っていた。

「これ、どうなってるんです？
御朱印のアプリ、さっきから全然動かへんのやけど…。」

「え？」

小都華が覗き込むと、女性のスマートフォンの画面は異様なことになっていた。本来なら美しい和柄の背景が表示されるはずの画面に、まるで墨汁を零したような黒い染みが広がっている。

染みは脈打つように蠢き、その中心には文字化けした「凶」という文字が、エラーコードのように大量に羅列されていた。

「うわ、なんやこれ。悪趣味やな。」

小都華は関西弁で素直な感想を漏らした。

単なるバグではない…スマートフォンの表面から、夏場放置された水槽のような、饅えた匂いが漂ってくるのを感じたからだ。

(またかいな…。)

小都華が短く息を吐くと、彼女の足元の影がわずかに揺れた。影の中から、するりと白い管狐のような姿をしたデジモン…クダモンが姿を現した。一般の人間には、その姿をはっきりと認識することはできない。

クダモンは何も言わず、ただ静かに首を振り、女性のスマートフォンへ向けて微弱な浄化のデータを送った。

神社でいうお祓いに相当する、データ修復のプロセスである。

小都華は懐から小さな御札を取り出し、スマートフォンの裏側にそっと触れさせた。

「すみませんねえ、ちょっと電波の調子が悪いみたいで、ほら、直りましたよ」

小都華が笑顔を取り繕って画面を見せると、黒い染みは嘘のように消え去り、元の美しい御朱印の画像が戻っていた。女性は狐につままれたような顔をしながらも、「ああ、おおきに」と去っていった。

「まったく、最近こういうの多すぎひん？」

小都華がぼやくと、クダモンは細い目をさらに細め、どこか遠くを見るように境内の外へ視線を向けた。

デジモンという存在が、電子ネットワーク時代に再び輪郭を得た怪異や妖怪の類であるならば、この程度の「いたづら」は日常茶飯事だ。

だが、小都華の肌は、先ほどの黒い染みから発せられていた湿り気を、まだはっきりと覚えていた。

太陽はこんなにも明るいのに、背筋を撫でる風だけが、妙に冷たかった。



社務所の中は、業務用のエアコンが低く唸りを上げ、肌寒いくらいに冷やされていた。

しかし、室内を満たしている空気は決して快適とは言えなかった。肺に吸い込むたび、目に見えない細かい砂利が気管にへばりつくような、異様な息苦しさがある。

普段は温厚で笑顔を絶やさない神主が、今はパイプ椅子に深く腰掛け、デスクの上に置かれた自分のスマートフォンを血の気の引いた顔で見つめていた。

「小都ちゃん」

竹箒を片付けて戻ってきた小都華が呼ばれ、足を止める。

「ちょっと、これを聞いてくれないか」

神主は、まるで汚物か爆発物でも扱うかのような慎重な手つきで、スマートフォンを机の中央へ滑らせた。画面には、見慣れない音声データの再生バーが表示されている。

「なんですか、これ」

小都華が訝しげに再生ボタンへ指を伸ばした、その瞬間だった。

社務所の空気が、物理的な質量を持って歪んだ。

『……ハルカヲ……タス……ケテ……』

ノイズまじりの、ひどく掠れた悲鳴のような声。

だが、小都華の胃の腑を直接掴み上げたのは、その声の主の切迫感ではなく、背後に張り付いている「音」と「匂い」だった。

ざばり。ざばり。

重たく、粘り気のある水塊が岩肌に叩きつけられる音がする。ここは海から遠く離れた市内の神社である。それなのに、録音データが再生されている間だけ、社務所の密閉された空間に、むせ返るような濃密な潮の匂いが充満した。

太陽に焼かれて腐敗した海藻と、古い電子基板が黒焦げになったような、化学的で生臭い悪臭。

さらに、波音の隙間から、ぶくぶくと水面で泡が弾ける音に混じって、古い読経のような、あるいは呪詛のような低いノイズがうねっている。

小都華は反射的に両腕を強くさすった。冷房のせいではない。皮膚の表面に、見えない冷たく濡れた布を何重にも被せられたような、生理的な圧迫感があった。

「…これ、ただのイタズラとちやいますん？」

小都華の低い声に、神主は重々しく頷いた。

「今朝、うちの留守番電話と、御朱印アプリの管理サーバーに同時に入っていたんだ。実は……ここ数日、市内の他の神社でも、似たような不審なノイズや水滴の怪異が報告されていてね」

神主は、引き出しから一束の封筒を取り出した。

「放っておけるものじゃないし。…伽夜子さんたちに、頼もうと思う。」

伽夜子。表向きは悪霊祓いを生業としているが、その実態はデジモンや電子ネットワークが絡む怪事件を専門に処理する請負人である。

小都華のアルバイト先であるこの神社の神主は、彼女の手腕を誰よりも信頼していた。だが同時に、「彼女を呼べば、確実に法外な依頼料をむしり取られる」という世俗的な畏れも抱いているらしかった。

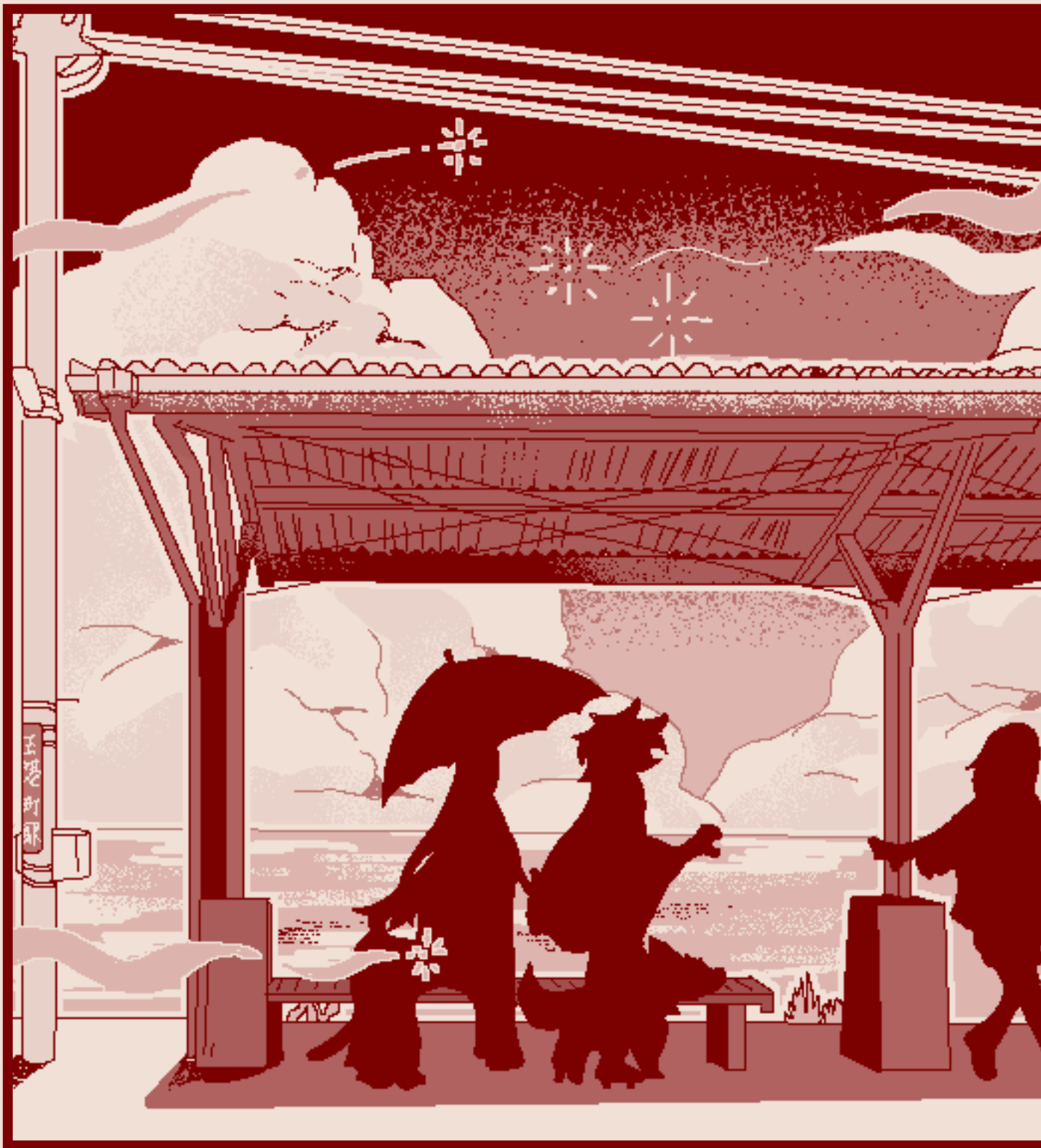
小都華は、内心で神主の財布に手を合わせつつ、もう一度、再生の止まったスマートフォンを見下ろした。

(……ハルカ?)

助けを求めるその声は、いつもの乾いた電子怪異のそれとは違う。じつりと湿り、今にも暗い水底へ引きずり込まれそうな、生々しい恐怖の輪郭を持っていた。



夏の日差しが、アスファルトを白く焼き焦がしている。少し年季の入ったアパートの一室、「穢い屋、伽夜ちゃん。」の事務所兼住宅の網戸越しには、耳鳴りのようにけたたましい蝉時雨が容赦なく降り注いでいた。首を振る安物の扇風機が、規則的な機械音を立てながら生温い空気をかき回していた。「…う～ん、これがその送られてきた音声データってわけだねえ」デスクチェアに深く腰掛けた伽夜子は、長い足を組み、薄く青みがかった瞳でノートパソコンの画面を見下ろしていた。小都華は、ガラスの表面にびっしりとついた結露を指の腹で拭いながら、スピーカーから流れる重い波音にじっと耐えていた。「こ…これ…ただの環境音じゃないですね」向かいに座る月彦が、ボソボソとした、わずかに吃音を交えた声で呟いた。丸まった背中では強張り、ノートパソコンから出力される波形データを食い入るように見つめている。「どういうことや、月彦?」「波の音に聞こえますけど、現実の音じゃない…海を模倣して生成した音です。…それに、この波形…」月彦がキーボードを数回叩き、音声の波形データをモニターの限界まで拡大表示する。画面に映し出されたのは、無機質なデジタルの直線ではなかった。曲線が交わり、まるで無数の魚の鱗がびっしりと重なり合っているようなパターンが浮かび上がった。「うわ、キショ…ひどいデータ汚染やな」「単なるバグじゃないね。…ひどく呪術的なプロトコルを感じるねえ」伽夜子が低い声で同意し、指をパチンと鳴らした。「厄介なのは発信元だね、IP アドレスも GPS も完全に欠落している…ただ、発信の痕跡だけは、京都府の北部…赤牟市…平成に合併した王港町という港町の方角を示しているね。」「王港町…海辺の町、ですね。」「月彦はぼつりと呟き、手元に引き寄せていた分厚い資料から目を離し、もう一度モニター上のメタデータを凝視した。「…?ここ、時間がおかしいですね。」「月彦の吃音が消え、声に探求者特有の冷徹な響きが宿る。「この救援信号を発信した端末…おそらくデジヴァイスのログですが、タイムスタンプが現実の時刻とズレています。」「遅延やバグじゃないのかい?」月彦は、画面の片隅に別のウィンドウを開き、王港町周辺の今日の潮見表を表示させた。「…恐らく…D-3の時刻ログですが、潮見表の満潮時刻と完全に同期しているんです。…場所の鍵じゃない。潮の鍵です。地図で探しても、たぶん開かない。」「地図には存在しない、潮の満ち引きという月の引力と同調して開く戸口。理解の及ばない暗い海の底から、何かががじっとりとこちらの世界を覗き込んでいるような感覚に、部屋の沈黙が深くなる。だが、その這い寄るような恐怖の空気を、物理的な熱量を持った声が強引に叩き割った。「…要するにやな!」小都華が、両手でドンッとちゃぶ台を叩き、立ち上がった。「そのハルカって子が、わけのわからん気味の悪い海のお化けみたいな連中に攫われかけて、相棒のデジモンが泣きながら助けを呼んでる…そういうことやろ!」彼女のハキハキとした関西弁には、月彦が感じ取ったような畏怖も、伽夜子のような知的な分析も含まれていない。あるのは、極めて真っ当で、飾らない純粋な生者の「怒り」だけだった。「そんなん、放っておけへんやろ! ほな、行くしかないやんか!」小都華の健康的な生きた熱気が、部屋に澱んでいたじめじめとした死の湿気を一瞬にして吹き飛ばす。その言葉に、月彦の強張っていた肩の力がわずかに抜け、伽夜子は口角を上げて艶やかに微笑んだ。「ふふ、お姉さん小都ちゃんのそういうとこだ～いすきチュッチュ。」「うわ! きっしょ! やめてえな! もう!!!」「ふふっ…しかし、神主も覚悟の上でこっちに依頼したんだ。ま～た、たっぷりふんだくらせてもらわないとねえ。げへへ。」金に目の眩んだ厭らしい表情をする伽夜子を見つつ（おっちゃん、ほんまご愁傷様やで…）と内心で手を合わせつつ、小都華は力強く頷いた。



王港町の駅に降り立った瞬間、暴力的なまでの夏の輪郭が一行を包み込んだ。空は突き抜けるような青色を誇り、巨大な入道雲が水平線の向こうで沸騰するように湧き上がっている。駅前のロータリーを抜けると、すぐそこに海があった。

だが、それは録音データから滲み出していたような、生き物の胃袋のようにうねる鉛色の海ではない。

白く輝く堤防。打ち寄せる波はリズムカルに砕け、無数の光の粒となって飛沫を上げている。カモメの甲高い鳴き声上空を横切り、海沿いの商店街からは、氷を砕く音や魚屋の威勢のいい声が潮風に乗って届いた。店先に並べられたラムネ瓶のビー玉が、強い日差しを乱反射してきらきらと輝いている。

ここは、生命力に溢れた「生きている海」の町だった。海は時に命を奪う残酷さを持つが、それでも人々は海の恩恵を受け、暮らしの音を立てて生きている。

「うわーっ、めっちゃええ天気！ 海の匂いするわ！」

小都華は大きく背伸びをし、肺いっぱい潮風を吸い込んだ。彼女の健康的な足取りは、これから怪異に立ち向かおうというのに悲壮感を感じさせない。影の端には、クダモンの細長い白い姿が寄り添っている。

「ふふっ、本当にいい景色じゃないか。日焼けには気をつけたいところだけどねえ」

伽夜子は白い日傘を優雅に回し、涼しげな横顔を海風に向けた。

「あ、あの…小都ちゃんさん、あまり先に行かないでください」

月彦は目を細め、猫背をさらに丸めながら小都華の後を追った。

明るく、健全で、正しい夏の港町。

しかし、月彦はその眩しさの中に立ちながら、海に面して建ち並ぶ「舟屋」の構造に目を奪われていた。

一階部分が海へ向かってぼっかりと口を開け、舟を引き入れるようになっている独特の家並み。光が強ければ強いほど、その一階の空洞部分には、墨を流し込んだような漆黒の影が澱んでいる。

生きている海のすぐ裏側に、死んだ海がぴったりと張り付いているような、微かな不一致。月彦の背筋を、見えない冷たい指がそっと撫で上げた。



白光に支配されていた海岸通りから、一本内陸の路地へ足を踏み入れた瞬間だった。

王港町の空気は微かに、しかし決定的にその性質を変えた。先ほどまで網膜を焼いていた太陽の熱線は、軒を連ねる古い木造家屋に遮られ、細い路地に黒々と澱んだ影を落としている。潮風に乗って届いていたカモメの鳴き声や、ラムネ瓶が触れ合う涼しげな音は不自然に遠のき、代わりに木立の隙間から降り注ぐ蝉時雨が、耳鳴りのように鼓膜を塞ぎ始めた。

肌にまとわりつく風からは、生きている海が持つ健全な磯の香りが消え失せている。古い畳が湿気を吸って重く呼吸しているような澱んだ空気と、日陰特有の埃っぽさが、肺の奥にじっとりと張り付いてきた…先を歩いていた月彦が、ふと足を止めた。「……月彦君？」

伽夜子の声に、月彦は無言のまま路地の錆びたトタン屋根の古書店へ視線を向けていた。

店先のワゴンには、潮風に晒されてカバーが波打った郷土資料が無造作に積み重ねられている。

月彦は、まるで見えない糸に手首を引かれるような緩やかな動作でワゴンへ近づき、一番下に平積みされていた一冊の分厚い写真集を引き抜いた。

「えっと…『昭和の残光』…撮影者は、藤宮伊衛門…。」

ポソポソと、微かな吃音を交えながら眩き、重い表紙を開く。湿気を吸い込んだ厚手の紙が、特有のカビの匂いを放った。だが、月彦の鼻腔の奥を撫でたのは、冷たく生臭い匂いがインクの裏側から立ち昇ってきたのだ。

小都華も横から首を突っ込み、そのページを覗き込む。しかし、海へ向かってぼっかりと口を開けた一階の空洞の奥が、どれも異様だった。日常の漁具や生活の小舟が置かれているべき場所に、出処の知れない装飾や祭具がひとつの塊のように絡み合っただり吊りされている。「…亀甲に似た敷石。蓬莱山に似た灯台。玉手箱めいた写真箱…それに、葦船に似た黒い小舟」

月彦は、ページ上の被写体を指先で一つ一つなぞりながら、ひどく慎重に言葉を選ぶ。

「魚尾のある聖母像…十字の影を持つ観音…。」

「なんや、ごっちゃごちゃしてんなあ。それに生活の写真ちゅうかカルトちゅうかな」ページをめくると、さらに異様な一枚の写真が現れた。

遠目には、雨の中を海へ向かって進む「花嫁行列」のように見える。だが、小都華の胃の腑が、内側から冷たい手で掴まれたように収縮した。

「…なんで誰も、この子の顔見てへんの？」

写真の中央を歩く少女は、華やかな花嫁衣装ではなく、身体の線を完全に隠し去るような重い白布を被せられている。そしてその上から、異様に太く、黒々とした腹帯が幾重にも巻き付けられていた。

少女は全く笑っていない。というより、瞳の焦点が虚空へ抜け落ちていた。

更に幾枚の写真には花婿の姿は、列のどこにもない。

「あると言えば、あるけど昭和の時代でここまで儀式的にしっかりやるのも珍しいね。」

伽夜子が冷ややかな声で言った。だが、その声音には強い警戒が滲んでいる。「…キャプションには、『蔭洲升』とあります。でも、聞いたら店主さんは、そんな地名は知らないと…。」

月彦が、冷たい汗の滲む手で写真集をバタンと閉じた。

写真に写っていた黒い小舟と、重い腹帯を巻かれた少女の姿が、次の潮を待つ暗い空洞のように、網膜にべったりと張り付いて離れない。

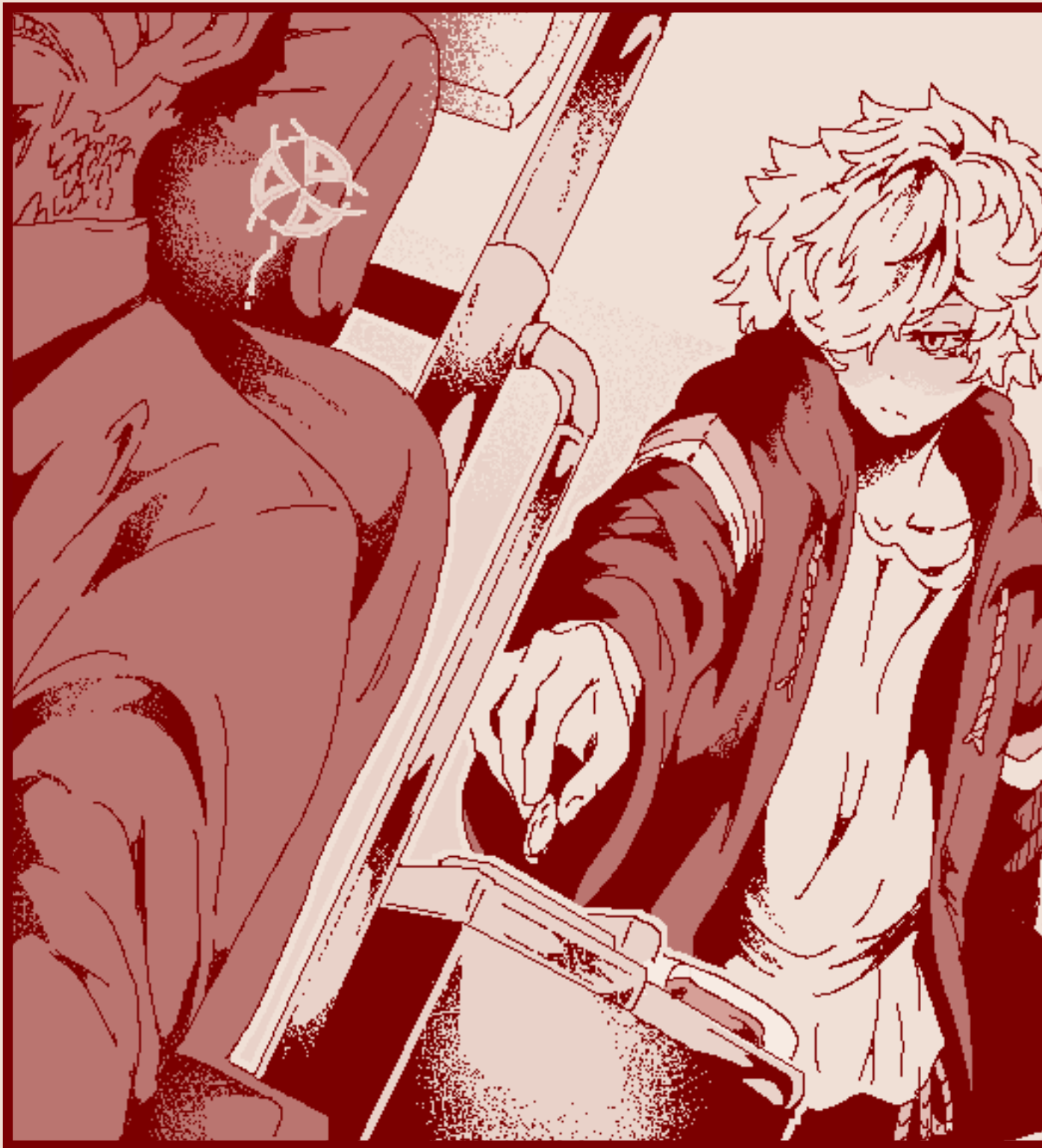
「急ぎましょう。遥さんの家へ」

月彦の低い声に促され、三人は逃げるようにその路地を後にした。



遥の家は、路地の突き当たりにある古い平屋だった。
小都華が門扉を開け、玄関の引き戸に手をかけた。鍵はかかっていたいなかった。
「すんませーん! 渚さん、いてはりますかー?」
小都華が努めて明るい声を張り上げ、引き戸を横に開け放つ。
その瞬間、外で彼らを焦がしていた凶暴なまでの熱気が、見えない分厚い壁にぶつかったかのように完全に遮断された。
家の中は、真昼間だというのに照明が点いておらず、異様なほどに暗い。
そして、異常なまでに冷たかった。
冷房が効いているわけではない。光の届かない地下室や、水気の多い鍾乳洞の奥底に足を踏み入れた時に感じる、骨の髄まで染み込むような底冷えだった。
鼻腔を突いたのは、古い畳の匂いと、微かな線香の香り…それに混じって、あの神社の録音データで嗅いだ、腐った海藻と鉄錆のような死んだ潮の匂いがあった。
小都華が両腕をさすって身震いした時、奥の暗がりから、ずり、と重い足音がした。
「…うわ、なんかここ、寒っ」「ちょっと小都ちゃんさん…!」「ふふ…」
廊下の奥、襖の陰からゆっくりと姿を現したのは、小柄な老婆だった。
だが、月彦と伽夜子は思わず息を呑み、身体を硬直させた。
暗がりから浮かび上がった老婆の顔が、一瞬、長時間水に浸かって白く膨張した水死体のように見えたのだ。
水分を過剰に吸ってぷよぷよと重くなった皮膚が垂れ下がり、虚ろに濁った巨大な眼球が、瞬きもせずぬらぬらとこちらを見つめている。
月彦がポケットのデジヴァイス iC に指をかけ、筋肉を強張らせたその直後。
「あ、あの…どなたさんよろか?」
老婆が小都華の姿を視界に捉えた瞬間、その顔は、孫の帰りを心配し、長年の疲労に苛まれたごく普通の、しわがれた祖母の顔へと元に戻っていた…錯覚だったのか。
いや、違う。月彦の背中には、氷のような冷や汗がびっしりと張り付いている。
この家はすでに、外の明るい海とは違う、底知れぬ異界…海に半分ほど浸かっているのを感じ取った。

「遥なら、蔭洲升におるはずやわ」
麦茶が出された薄暗い居間で、祖母はぼつりと言った。
その声には、深い悲しみと、抗いようのない泥のような諦めが混じっている。
「おばあちゃん、それってどこにある町なん?」
「王港のはずれにある、あのトンネルを抜けたとこや。あの子な…ずうっとふさぎこんどってな…。せやから、蔭洲升に呼ばれたんや。
あっこはな、そういうもんが帰る場所やさかい。帰ったもんは、また来るんや…ややこを抱えて。産んでもろて、ほんで今度は、あの子がそのややこを抱く番になるんや。」
祖母の口ぶりは、まるでそれが世界の絶対的な理であり、祝福すべき摂理であるかのように自然だった。
だが、語られている内容は完全に狂っている。一人の少女が、何かの子を孕むための器として連れ去られたことを、肉親が肯定しているのだ。
伽夜子が、扇子を畳んで静かに口を開いた。
「一つ聞きたいのだけど…その『蔭洲升』という地名。貴女は、誰から聞いたのだい?」
「え…?」
祖母の顔から、ずっと表情が抜け落ちた。
「誰からって…そら、昔から…」
祖母の目が、水面を漂う木の葉のように激しく泳ぎ始める。皺だらけの手が、自分の膝の上で所在なさに小刻みに震えた。
「昔から、知ってる…いや、誰に教わったんやろか。地図には…地図にはないのに。うち、なんであの子が蔭洲升におるって、知ってるんや…?」
祖母は本気で孫を心配している。決して嘘をついているわけではない…だが、彼女の記憶の根底に、いつの間にか黒いインクがポタリと垂らされ、論理が完全に破綻しているのに、事実だけがそこに癒着している。人間の認識や記憶という強固なはずの境界線がドロドロと溶かされている。
月彦は、居間の仏壇の横に飾られた写真立てに目を向けた。遥と、その両親が海辺で笑っている古い写真。
だが、写真立てのガラスの内側だけが、びっしりと結露して湿っていた。そして、写真の中で笑う遥の足元だけが、黒い染みのようにねっとり濡れて歪んでいる。
「…行きましょう」
月彦は立ち上がり、静かに、しかし断固とした声で言った。
「あ、あの…おばあさん。遥さんは、僕たちが必ず連れて帰りますから」
月彦の言葉に、祖母は答えなかった。ただ虚ろな目で、乾いた手の中の何も入っていない湯呑みを見つめ続けていた。



王港町の外れ。海鳴りが遠のき、山肌が迫る旧道に、その錆びついたバス停は立っていた。赤茶けた鉄柱に支えられた丸い標識には、塩風に晒されて半分剥がれかけた手書きの文字で薩洲升町 行と記されている。

暴力的な真夏の日差しがアスファルトをじりじりと焦がしているというのに、バス停の周囲に落ちる影だけが、不自然なほどに色濃く、そしてじっとりと濡れていた。

遠くから、古いディーゼルエンジンが重苦しく喘ぐような音が聞こえてくる。

やがて陽炎の向こうから姿を現したのは、車体のあちこちがひどく錆びつき、緑色の苔のようなものがこびりついた旧式のボンネットバスだった。

プシュウ、と濁った排気音を立てて、折れ戸が開く。

「…。」

乗り込もうとした小都華の足が、一段目のステップでピタリと止まった。

「なんやこのバス…床、べちゃべちゃやんか」

小都華の呟きに、後ろに続く月彦も息を呑んだ。クーラーなど効いていないはずの車内から、まるで冷蔵庫の底に溜まった冷気のような風が這い出してきたのだ。床板は、誰かがバケツで大量の海水をぶち撒けたようにどす黒く濡れそぼっている。

そして、鼻腔を強烈に突くのは、炎天下で内臓を抜かれた魚が腐敗していくような生臭さと、古い鉄錆の匂い。

「…す、すみません。大人三人、お願いします」

月彦は微かに声を震わせながら、運賃箱に小銭を落とそうとした。

だが、運転席に座る男は無言だった。深く被った制帽の鏝で顔は全く見えず、ただ前方の窓ガラスだけを向いている。

しかし、帽子の下から覗く首筋の皮膚には、人間のそれとは異なる青白くぬめりとした光沢が、ゼリーのように張り付いていた。

…のように一瞬月彦には、見えた。

伽夜子が扇子で口元を覆い、月彦の耳元へ顔を寄せる。

「…まるで、霊柩車に乗っている気分だねえ」

いつもの飄々とした演技染みた声であるが、冷ややかな、しかし明確な警戒を含んだ声。

バスには、彼ら以外の乗客は一人もいなかった。

ガタガタと車体をひどく軋ませながら、バスは山間の道へと進んでいく。

窓の外の景色から、青い海が完全に隠れた。迫り来る山肌の緑はどこか黒ずんでおり、生気が感じられない。

耳鳴りのように響いていた蝉時雨が、一つ、また一つと、まるで電源を切られるように途切れていく。

代わりに、車体の床下から、あるいは窓ガラスの隙間から、ざぼり…ざぼり…と、重く粘り気のある波音が響き始めた…山の中を走っているはずなのに…前方に、鬱蒼とした木立に飲み込まれかけた、赤レンガ造りの古いトンネルがぼっかりと口を開けているのが見えた。

「トンネル…。」

月彦が呟く。

バスがその暗黒の口へ近づくにつれ、窓の外を照らしていた夏の白い光が、急速に色褪せ、濁った雨水のような灰色へと変質していく。

日常の論理が、物理法則が、音を立てて溶け落ちる。

理不尽で湿った異界への入り口が、彼らに乗せたバスを丸ごと、その暗い胃袋の中へと飲み込んだ。



バスが赤レンガのトンネルへ滑り込んだ瞬間、世界から夏が切断された。
天井に等間隔で並ぶオレンジ色のナトリウムランプはひどく頼りなく、車内を照らすというよりは、座席の影を不気味に長く引き伸ばす役割しか果たしていない。「なんやここ…クーラーも点いてへんのに、急に冷えてきたな。」
小都華が両腕をさすりながら、窓ガラスに額を近づける。ガラスの表面には、すでにびっしりと結露が浮かんでいた。外の光が水滴に乱反射し、視界を不気味に歪ませる。呼吸をするたびに、生温かく、ひどく塩辛い空気が肺の奥まで侵入してくる。気管の粘膜に、見えない泥がこびりつくような息苦しさ。
ふいに、頭上の車内灯が不規則な瞬きを始めた。
「ジジッ、ジッ。」
ただの接触不良ではない。光が途切れるコマ数秒の暗闇の中、視界の端に、四角いブロック状のデジタルノイズがモザイクのように走ったのを、月彦は見逃さなかった。「伽夜子さん。」
「ああ。境界が、溶け始めているねえ」
伽夜子が日傘の柄を両手で握り締め、楽しげな声色の裏に冷たい殺気を忍ばせる。次の瞬間、車内の照明が完全に落ち、トンネルのナトリウムランプさえもふっと消滅した。完全な暗闇…同時に、むせ返るような濃い霧が、閉め切られているはずの車内どこからともなく湧き出してきた。
ただの水蒸気ではない。それは圧縮された古いデータのように重く、皮膚の表面にねっとりまとわりつき、視界だけでなく聴覚すらも奪い去っていく。「ちょっ、なんやこれ！ 前見えへん！」
小都華の焦ったような声が、まるで水底から発せられたようにくぐもって聞こえた。「小都ちゃんさん！ 動かないで……！」
月彦が座席から立ち上がり、彼女のいた後方座席へ手を伸ばす。だが、月彦の指先が掴んだのは、濡れて冷たくなったシートだけだった。「小都ちゃんさん!？」
返事はない。足元にいたはずのクダモンの気配も、完全に途絶えている。つい数秒前までそこにいたはずの少女の存在情報が、跡形もなく消え失せていた。神隠し。あるいは、プロトコルを無視した強制的な隔離。
月彦の背筋を、強烈な悪寒が駆け下りる。「う、運転手さん！ 止めてください！ 人が、人が消え…！」
月彦は運転席へと身を乗り出し、声を張り上げたが、ブレーキは踏まれない。バスは暗闇の霧の中を、一定の速度で走り続けている。「運転手さん！」
月彦の叫びに、運転手はゆっくりと、本当にゆっくりと首だけを後ろへ向けた。制帽の下から現れたその顔に、月彦は息を呑み、全身の筋肉を硬直させた。それは、人間の顔ではなかった。
両目の間隔が異様に離れ、まぶたという器官が存在しない。ぬらぬらと光る巨大な眼球が、一度も瞬きをすることなく月彦を見据えていた。首からエラにかけての皮膚は青白く変色し、ゼリー状の粘液に覆われ、そして霧の様に揺らめいている。「そっちは…駄目だ…穢れが混じってる…、乙女にはなれん。」
運転手の喉の奥から、空気が漏れるような、あるいは泥水が沸騰するような音が鳴った。それはハンギョモンによく似た、しかし純粋なデジモンとも異なる、ひどく歪で悍ましい『何か』だった。



（伽夜子さんの身体が半分デジモンで構成されてるのを見抜いたのか…？
欲しがってるのは…常世の女、子供を宿せる女か…！）

「コヅキガルルモン!!」

月彦の叫びと同時に、彼の足元の影から銀色の獣が跳躍した。
コヅキガルルモンが空中で身体を捻り、首に巻かれた赤い注連縄を光らせる。
だが、敵の動きも異常だった。ハンギョモンに似た「何か」は、その場から腕だけを異様な長さまでゴムのように引き伸ばし、月彦の顔面へ向けて巨大な水掻きのある手を突き出してきた。
「月彦君!」

伽夜子の声。同時に、一枚の白い御札が闇を切り裂いて飛び、伸びてきた腕の関節にピタリと張り付いた。

炸裂音と青白い火花が散り、敵の腕が強引に弾き返す。

「ブシアグモン殿!手加減は無用だよ!」

「応!!ワシの超高速一文字斬り、とくと見い!ワシコ!合わせい!」

コヅキガルルモンがハンギョモンに人魂状の炎を当てようとするが弾かれる。
しかし、人魂状の炎は消えずバス内に満ちた水に落下しそこから高温の水蒸気を発生させ、その熱に何かは一步後ずさり更に視界を塞いだ。

飛び出したブシアグモンが、得物を構え、弾かれた敵の腕を足場にして肉薄する。

空気が鋭く鳴り、一陣の風が車内の霧を切り裂いた。

ブシアグモンの一撃が、ハンギョモンに似た怪物の胴体を斜めに両断する。

遅れて、再びコヅキガルルモンが口から青い人魂状の炎を吐き出し、敵の顔面を正確に撃ち抜いた。

勝負は一瞬だった。

月彦もすでに、ポケットから赤いデジヴァイス iC を引き抜き、もう片方の手には呪符をびっしりと巻き付けた鉈を握りしめていた。

だが、彼が踏み込む前に、敵は形を崩し始めていた。

しかし、爽快な勝利の感覚は微塵もない。

胴体を両断され、炎に焼かれた敵からは、血の一滴も流れ出なかった。デジモンが倒された時に飛散するはずの、光のデータ粒子すら現れない。

運転手の身体は、まるで腐った泥が溶けるように、ぶくぶくと醜い泡を立てて足元へ崩れ落ちていったのだ。

「…おいおい、月彦ちゃん。なんだい『コレ』は……手応えが全くねえぜ?」

「うむ…隙を作って外に出て完全体になってから本番と思っていたが…。」

「完全体のハンギョモンにしてはあまりにも…。」

ブシアグモンが刀を振り下ろした姿勢のまま、怪訝そうに鼻を鳴らす。

崩れゆく泡の塊の中から、残骸となった大きな眼球だけが、ギョロリと月彦たちを見上げた。

『お前達は呼ばれていない…陀金（だごん）の海は…。』

それは、空気の振動ではなく、直接脳髄に響くような声だった。

『…呼ばれた者…選ばれた乙女しか…常世からは渡れない…。』

テレビの電源が切られたような音と共に、泡の残骸は完全に蒸発し、後には息が詰まるほどの生臭さだけが残された。

主を失ったバスは、しかし依然として一定の速度で霧の中を進んでいる。

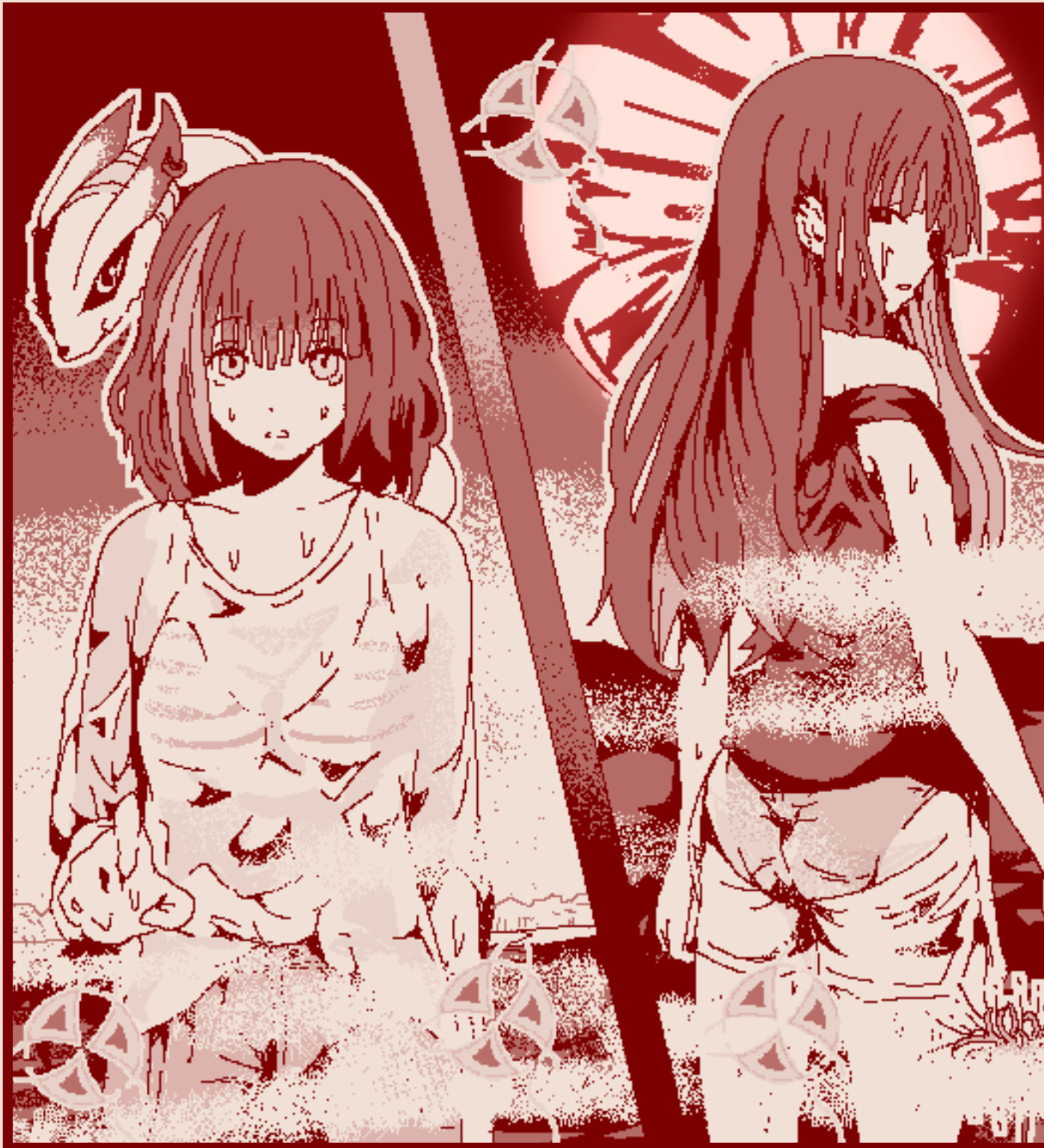
「小都華さん…。」

月彦は鉈を下ろし、誰もいない後部座席を見つめた。

呼ばれた者しか、渡れない。

その言葉の意味するものが事実であるならば、小都華は今、あの腐臭のする声の主たちが待つ蔭洲升の底へ、たった一人で引きずり込まれてしまったということになる。

月彦の奥歯が、強く噛み合わされた。



全身を重い鉛の布で包まれたような感覚だった。
小都華は、顔に当たる冷たく湿った風の感触で意識を取り戻した。

「…う…ん…。」

ゆっくりと目を開ける。

視界のピントが合うにつれ、彼女は自分が仰向けに倒れていることに気がついた。
身を起こそうとしたが、身体が異常に重い。真夏だということに、吹き付ける風は骨を凍らせるほど冷たい。それでいて、湿度がまとわりつくように高く、服が、まるで大量の塩水を吸い込んだように重く冷たく肌に張り付いていた。

「なんや…、ここ…。」

「小都華、無事？」

すぐ脇から聞こえた冷静声に、小都華は弾かれたように顔を向けた。

黒ずんだ砂の上で、白い管狐のような姿をした相棒のクダモンが、体を震わせてまとわりついた砂を振り落としていた。

「クダモン！ よかった、はぐれへんかったんやな」

小都華はほっと息を吐き、クダモンを抱き寄せようとしたが、その白い毛並みはひどく冷たく、じっとりと湿っていた。

「うわ…キショい」「おい！ ていうか小都華も同じだよ！」「うげ！ ほんまや！」

立ち上がり、周囲を見渡す。

足元にあるのは、白い砂浜ではなかった。黒ずんだ砂に混じって、錆びたUSB端子、ひび割れた緑色の電子基板、そして千切れて腐敗したケーブルの束が無数に打ち上げられ、まるで機械の墓場のような海岸線が続いていた。

空は厚い鉛色の雲に覆われ、太陽の光は一切届いていない。

目の前には、暗く濁った海と赤く輝く月のみが広がっている。

波は一定のリズムで打ち寄せているが、それを生きている海とは小都華には思えなかった。

鳥の声も、虫の羽音も、魚が跳ねる水音もしない、静寂と死の匂いが支配していた。

「月彦…伽夜子さん…？」

呼んでも、返事はない。

「通信も繋がらない…。ここは現実世界は勿論ないけど…私たちの知るデジタルワールドとも違う…気がする…。」

クダモンが細い目をさらに細め、濁った海を警戒するように見つめた。

小都華は自分の腕を抱きしめ、肌に粟立つ寒気を必死に抑え込んだ。

普段なら「冗談きついわ！」と軽口を叩くが、この空間は、彼女の持つ常識という壁をじわじわと、しかし確実に溶かしてくるような気味の悪さがあった。

「あかん、ビビってたらアホらしいわ！ なんやねんこの海、めっちゃ陰気臭いし」

彼女はパンッ！と両頬を両手で強く叩き、強引に気合を入れた。手のひらの痛みが、自分が生きているという輪郭を辛うじて保たせていた。

全身を重い鉛の布でくるまれたような、逃げ場のない圧迫感だった。

見渡すと波打ち際を舐める鈍色の水面を見つめ、海につかる人影があった。

小都華が駆け寄ると、少女は、首の折れた人形のようにゆっくりと小都華の方へ顔を向けた。

「あんた…が、渚 遥さん？」

「…あんたは…誰？」

陸洲升の海で小都華は探している少女を廻りあった。